症 例

100歳女性の特発性直腸穿孔緊急手術の1例

津島市民病院外科

日江井 賢 松 崎 安 孝 弥 政 晋 輔
河 合 正 巳 松 永 宏 之 山 口 喜 正

症例は100歳女性。腹痛を主訴に入院した。保存的治療に反応せず腹膜炎の増悪を認めたため緊急手術を施行した。直腸の間膜側への穿孔による膿瘍を認め Hartmann 手術を施行した。術後経過は良好で66病日退院した。組織学的検索で特発性直腸穿孔と診断した。

100歳以上の全身麻酔下開腹例の本邦報告例は3例目であり、緊急手術で救命しえたのは自験例のみであった。

索引用語：超高齢者緊急手術，特発性直腸穿孔

はじめに

近年の高齢者の増加および手術，麻酔技術の進歩に伴い，80歳以上のいわゆる超高齢者の手術例も増加しつつある。しかし100歳以上の症例となると，その報告は極めて稀である。今回，われわれは100歳の特発性直腸穿孔例に対して緊急手術を施行し救命し得たので文献的考察を加え報告する。

症 例

症例：明治27年10月12日生。100歳，女性。

主訴：下腹部痛。

既往歴：特記すべきものなし。

家族歴：特記すべきものなし。

現病歴：1995年3月1日下腹部痛出現，救急車で当院内科受診，入院となった。

入院時現症および経過：意識清明，栄養状態良，血圧140/80，脈拍76，体温35.6度，眼球結膜に貧血，黄疸は認めなかった。腹部は膨隆し下腹部正中を中心に圧痛筋性防御，Blumberg 徴候を認め，腸雑音は低下していたが3月4日腹痛増強のため外科受診となった。

外科受診時検査成績：Hb 9.1g/dl と軽度貧血を示す他は白血球数5,300/mm³をはじめ肝機能，腎機能など正常値を示した。CRP だけは23.20mg/dl と異常高値を示した。

腹部 CT 検査：明らかな free air は認めなかったが

直腸周囲に gas 像を認めた (図1)。

腹部所見とその増悪傾向より保存的治療による救命は不可能と考え超高齢ではあるが，3月4日緊急手術を施行した。

手術所見：気管内挿管による全身麻酔下に開腹した。腹水および free air は認めなかった。直腸 Rs-Ra の間膜に腫脹し膿瘍が形成されており，直腸の間膜側への穿孔と判断した。穿孔部を中心に20cm の腸管を便汁および膿を腹腔内へこぼすことを可及的に避けつつ，剥離層は健常な部分として間膜ごと切除した。肛門側を Hartmann pouch とし人工肛門として左側腹部に造設した。手術時間は2時間16分，総輸液量は1,400ml，出血量80mlであった。

経過：術後18時間で気管内挿管を抜管した。超高齢

図1 腹部 CT 検査：矢印は直腸周囲のガス像を示す。

1997年2月3日受付 1997年5月16日採用

にもかかわらず合併症もなく順調に経過し、第5病日経口摂取開始、第66病日軽快退院した。術後1年6カ月経過した現在も自宅周囲を元気に散歩している。

切除標本肉眼所見(図2)：径15mmの類円形の穿孔部を認め、周囲粘膜には異常を認めなかった。腸管膜内には膿瘍が存在した。

病理組織学的所見(図3)：穿孔部辺縁では通常の粘膜上皮が急峻に途絶し、筋層も鋭く断裂している。好中球を主体とする炎症細胞浸潤は全層に及び、漿膜面まで達している。穿孔部では壁の肥厚、菲薄化、膿瘍形

図2 切除標本：矢印は穿孔部を示す。

図3 病理組織所見 (HE 染色, 20倍)：筋層は鋭く断裂している。好中球を主体とする炎症細胞浸潤は全層に及び、漿膜面まで達している。

成などは見られない。また上皮、間質とも異型成、悪性像は認められない。

考 察

本邦における平均寿命の延長はめざましく、ここ10年でも1985年には男74.78歳、女80.48歳から1995年では男76.57歳、女82.98歳¹⁾と上昇している。また総人口に対する超高齢者(80歳以上)の割合を見ても2.3%²⁾から3.8%³⁾と増加している。加えて、手術、麻酔技術の進歩により高齢者に対する手術適応の拡大に伴い、高齢者の手術は増加の傾向にある。1985年には65歳以上をもって高齢者手術を論じたもの⁴⁾が1994年には80歳以上をもってするまでになっている⁵⁾。欧米でも高齢者に対する手術をかなり積極的に施行しているものもあり CLEVERT ら⁶⁾は85歳以上406例に手術を施行し、死亡率は16.5%であったとしている。しかしその現状にあっても100歳以上での開腹例は極めて稀であり本邦での文献報告は自験例を含めて3例のみであり(表1)、緊急手術による救命例は自験例のみであった。

特発性大腸穿孔は外傷、大腸癌、憩室、潰瘍などの明らかな要因を有さない大腸の穿孔をきたした疾患をいう。その定義は肉眼的には坂部ら⁹⁾の報告がよく参考にされている。切除がなされ標本が存在する場合には乾¹⁰⁾らの提唱する①穿孔部辺縁で粘膜が断裂し、粘膜が穿孔部に入り込むような所見はみられない、②筋層の断裂を認め、しかもその辺縁は鋭く切れている、③急性から亜急性の炎症所見にとどまり、著明な肉芽や膿瘍形成は認められない、がその組織学的特徴とされている。特発性大腸穿孔は比較的稀な疾患であるが本邦報告例は160例を越えている。増田¹¹⁾らの集計によれば、穿孔部位に関してはS状結腸が75.9%と多く間膜膜付着部反対側が多かった。自験例のごとく直腸の間膜付着側での穿孔は稀であった。本症の治療は他の原因による大腸穿孔と変わるところはない。死亡率は29.1%と高率である¹¹⁾。

自験例では100歳という超高齢者にもかかわらず良好な経過を辿ったのは、心肺系に重篤な合併症が存在

表1 100歳以上開腹手術本邦報告例

報告者	年齢	性	疾患	緊急 or 待機	麻 酔	手 術	転 帰
小深田ら(1987)	100	男	急性胆嚢炎, 総胆管結石	緊急	硬膜外	胆嚢摘出, 総胆管切石, T字管設置	17病日脳梗塞死
平野ら(1994)	100	男	直腸癌	待機	全身麻酔	Hartmann 手術	軽快
自験	100	女	特発性直腸穿孔	緊急	全身麻酔	Hartmann 手術	軽快

しなかったことと、穿孔が腸間膜付着側に起こったために、腸内容の腹腔内漏出がなく、汎発性腹膜炎をおこさなかったためと考えられた。また超高齢者においてもそのメリットがデメリットを上回ると判断された場合には手術療法も積極的に施行すべきと考える。

おわりに

間膜付着側で穿孔した100歳の特発性直腸穿孔を経験し、緊急手術にて救命し得たので報告した。

文 献

- 1) 厚生省大臣官房統計情報部管理企画課総合解析係：日本人の平均余命，厚生指標 42：45—47，1995
- 2) 厚生統計協会：厚生指標，国民衛生の動向 33：355，1986
- 3) 厚生省人工問題研究所：第3回世帯動物調査，厚生指標 43：34—53，1996
- 4) 中村卓次，長町幸雄：術前からある合併症とその管理—高齢者。消外 8：728，1985
- 5) 長町幸雄，小板橋宏：術前からある合併症とその管理—高齢者。消外 17：672—673，1994
- 6) Clevert HD, Kattner A, Lindquist J, et al: The geriatric patients in surgery—Experience with patient over the age of 85 years. Ann Chir 45: 566—569, 1991
- 7) 小深田盛一，納富昌徳，難波雄一郎他：90歳と100歳における胆管結石手術の経験。日臨外医会誌 48：696—700，1987
- 8) 平野鉄也，吉岡秀憲：Leser-Trelat 徴候を呈した100歳直腸癌の1手術例。手術 48：251—254，1994
- 9) 坂部 孝，依光好一郎，山形省吾他：特発性大腸穿孔。外科 32：684—692，1970
- 10) 乾 秀，亀山仁一，佐々木巖他：特発性大腸穿孔の1例と単発性結腸憩室穿孔の2例。外科診療 8：1027—1030，1982
- 11) 増田英樹，谷口利尚，林 成興他：特発性大腸穿孔6例の検討。日大医誌 50：750—755，1991

AN EMERGENCY OPERATED 100-YEAR-OLD WOMAN WITH IDIOPATHIC PERFORATION OF THE RECTUM

Ken HIEI, Yasutaka MATSUZAKI, Shinsuke IYOMASA, Masami KAWAI,
Hiroyuki MATSUNAGA and Yoshimasa YAMAGUCHI
Department of Surgery, Tsushima City Hospital

An 100-year-old woman was admitted to the hospital because of abdominal pain. The patient did not respond to conservative treatment and aggravation of peritonitis was noted. An emergency operation was carried out. During surgery, an abscess due to a perforation of the rectum to the mesentery-side was confirmed, and a Hartmann operation was carried out. The postoperative course was uneventful and the patient was discharged from the hospital on the 66th hospital day. Histological diagnosis of idiopathic perforation of the rectum was achieved.

So far only three aged patients over 100 years old, including this patient, have undergone laparotomy under general anesthesia in this country, and only this patient's life has been successfully saved by an emergency operation.